

平成30年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	熊本県教育委員会
-----	----------

I 概要

1 選択したテーマ

テーマ	取組項目	選択
①交流及び共同学習を継続的な取組とするために、教育課程への位置付け等、組織的かつ計画的な取組の在り方に関する研究	(ア) 通常の学級に在籍する全ての児童生徒等に交流及び共同学習の機会を学校として計画的に実施するための方法に関する研究	○
	(イ) 障害のある児童生徒及び障害のない児童生徒等が、交流及び共同学習を通じ、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むために、交流及び共同学習のねらい、事前学習と事後学習、年間指導計画への位置付けの効果的な工夫に関する研究	○
	(ウ) 通常の学級の担任などの教職員が主体的に交流及び共同学習に取り組むための体制整備の在り方及び教職員の意識向上に関する研究	
	(エ) ICTを活用した交流及び共同学習に関する研究	
②学校間交流や居住地校交流等を進めるための関係する教育委員会との連携の在り方の研究	(ア) 特別支援学級が設置されていない小・中学校における学校間交流を推進するための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	(イ) 高等学校における学校間交流や居住地校交流を進めるための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	(ウ) 学校間交流や居住地校交流等を進めるための市町村教育委員会と都道府県教育委員会又は市町村教育委員会と市町村教育委員会の連携に関する研究	
	(エ) 居住地域の小・中学校等に副次的な籍を置くなど、居住地域との結びつきを強める工夫に関する研究	
③障害のある大人の人との交流や地域における高齢者等の世代を超えた交流の在り方に関する研究	(ア) 障害のある大人の人との交流に当たり、福祉部局や社会福祉法人等と連携したネットワーク形成に関する研究	
	(イ) 教育委員会と地域の関係者による「心のバリアフリー連絡協議会(仮称)」を設置し、取組状況や実施体制などの成果と課題について協議するなど、地域に心のバリアフリーの意識を啓発し根付かせるための研究	
	(イ) 高等学校の生徒や特別支援学校の高等部の生徒が、継続的に地域の障害のある大人の人との交流をするための方策に関する研究	○

2 事業の概要

熊本県では、県内での国際スポーツ大会開催に向けて、インバウンドバリアフリーサポーターの育成に取り組んでいる。本事業では、交流及び共同学習を通じて心のバリアフリーを推進するために、阿蘇郡小国町にある熊本県立小国支援学校とその近隣にある小中高等学校において実施した。

今年度は、障がい者スポーツであるボッチャを通じた交流及び共同学習を中心としながら、フロアホッケー、花苗植えなどを行った。小国支援学校が総合的な学習の時間を活用し、事前準備、当日の大会運営を行う「小国支援カップ」を開催し、参加者がボッチャやフロアホッケーの体験をすることで、障がい者や障がい者スポーツへの理解を広げた。

また、社会福祉協議会と連携したボランティア養成講座「チャレンジ小国GO！」を実施し、高校生等に手話やボッチャ体験を行い、地域と連携しながら理解を広げた。

3 事業の成果

今年度は、各学校との交流及び共同学習の場面で、主に障がい者スポーツであるボッチャを行った。ボッチャは障がいの有無にかかわらず、どのような年代でも楽しむことのできるスポーツであり、小中高等学校それぞれの交流及び共同学習の中でも、児童生徒にとってはルールが分かりやすく、親しみをもって取り組む姿が見られた。各学校との交流及び共同学習では、はじめはお互いに距離があったが、お互いにボールを取って渡したり、小国支援学校の生徒の手を取って場所を教えたり、チームのみんなでハイタッチをしたり、「おいしい、おいしい」と声をかけたりする姿が次第に見られ、ボッチャを通じて、心の距離が縮まっている様子が伺えた。

小国支援学校高等部が中心となって準備・運営をした「小国支援カップ」では、小国町と南小国町の学校や小国支援学校の卒業生など、18チーム90人の参加があった。昨年度はフロアホッケーを中心に行っていたが、今年度はボッチャを中心とした内容にしたことで、特に高校からの参加が多かった。また、ボッチャはルールが分かりやすいため、審判を教員が行うのではなく、小国支援学校の生徒と小国高校の大会ボランティアの生徒に任せることができ、生徒同士が協力しながら大会運営に関わることができるようになり、より密接な関係づくりにつながった。

また、小国町と南小国町の両社会福祉協議会との連携により行ったボランティア養成講座「チャレンジ小国GO！」では、手話講座とボッチャ体験を実施した。高校生だけでなく、地域の方も参加され、障がい者や障がい者スポーツへの理解が広まった。

さらに、小国町と南小国町のそれぞれのローカルテレビで「小国支援カップ」等について、取材や放送があり、多くの方に障がい者スポーツの魅力を紹介することができた。また、ラジオのFM小国でもボッチャのことを紹介してもらい、併せて理解啓発につながった。

これらの取組により、ボッチャのことが地域の中に広まり、小国支援学校には各学校や福祉施設、社会福祉協議会からボッチャ用具の貸し出しの依頼があり、学校や地域の中で、ボッチャの普及・浸透も見られている。

高等学校の生徒の交流後の感想の中に、「障がいの有無で、本当に関係ないかと改めて思った。私の中の障がいのある子たちに対する考え方が変わり、壁がなくなった。」とあった。まさに、この事業で目指している“心のバリアフリー”である。今後も、このような交流及び共同学習を継続しながら、一人でも多くの児童生徒の心をバリアフリーにできることを期待したい。

4 事業の課題とその解決のために必要な取組

- ①今年度、新たに小国支援学校と交流及び共同学習を始めた学校がある。今後も継続して実施していくために、年間計画における時数確保が難しい面もあるが、早い段階に両校担当で調整を行い、交流及び共同学習が計画的に行われるようにする。
- ③小国支援カップは、学校からの参加は増えたものの、一般の方からの参加は少ない状況であった。近隣の福祉施設からの参加を増やしたり、地域の高齢者の方々からの参加も増やしたりするために、まずはポッチャという競技に親しんでもらいたい。そのために、小国支援学校にあるポッチャの用具の貸し出しや講習会なども含めて、ポッチャの普及に努めたい。また、小国支援カップの開催について、さらに広く呼びかけを行い、参加者を増やすとともに、地域の方の関心を高めたい。

※「障害」のひらがな表記について：熊本県では、関係者からの「害」の漢字表記についての意見を踏まえ、平成20年1月から法令、条例、規則や固有名称を除き、「障がい」と表記するよう努めている。